

# 北条氏と東北地方

豊田 武

(一)

かつて私は、弘前大学「国史研究」三十号に、安東氏と北条氏と題し、この津軽で大きな勢力をもっていた安東氏が鎌倉政権の奥力者である北条氏と密接に結びつき、それを背景として、日本海に大いなる活躍をした事情を發表した。今日は、それをふまえて、さらに、北条政権が東北地方でどのような位置を占めていたかを、とくに北条氏の直轄領である得宗領の拡大を中心として述べ、建武政権の出現する必然性について考えてみたい。

鎌倉幕府が成立すると、頼朝の東北への遠征が開始される。それに伴って関東の武士団が、相ついでこの東北の地に移住を開始した。その移住の事情を考える場合に、史料の不足を補うものとして、東北各地における苗字の分布の研究をあはねることができると、苗字というのは、名主、名田の各に連なるもので、たとえは、藤原氏が地方にくわって各地に藤原氏の分家をつくるようになるのと、加賀介のあとが如藤、尾張守のあとが尾頭、近江掾のあ

とが近藤、高院頭のとが斎藤といふうちに、各地にそのわかれが繁殖してくるのである。斎藤は敦賀に本拠をもち、そして関東に移ってくるし、また佐藤は下野からさらに、信夫の荘司として東北の南部に主な勢力をもってきた。成田というような苗字も、関東の武蔵武士の一党である成田から出で、北に所領をもっていたことが八坂神社書に見える。なかでも関東南部出身の三浦、千葉などは鎌倉幕府の勢力ののびるにしたがって、東北地方に発展し、安東とか安倍とかの古い勢力を追いやって、だんだん領地をひろげて行った。熊野の海賊として有名な鈴木なども東北の各地に繁殖をする苗字の中には明治になつてから出たものがあるから、江戸時代の史料に基づいてその分布を考えると、武士の移住を知る手がかりがつかめると思う。

(二)

ところが、北条政権の成長に伴つて、その所領の拡大を背景として才二次ともいふべき鎌倉武士の移住がお

こなわれた。とくに東北地方は、北条氏が中期以後、陸奥守・出羽守を世襲するようになって、知行国乃至分国と同じような扱いを受けるようになった。東北がそれほど重視されたのは、才一に砂金の豊富な産地であり、才二に良馬の産地であったということであろう。北条政権はそれを確保することを才一の目標としておいた。このような北条氏の得宗領の拡大に伴って、こゝどは北条氏と関係の深い武士、たとえは工藤とか曾我とか南部とかが、東北で北条氏が地頭になつていると、その地頭代としてそれ／＼赴任してきた。

北条氏が最初にその拠点としたのは、後にいう陸奥守石打ち糠部・津軽の両地方であり、糠部は馬油川の河口八戸、津軽は黒石という要地を中心として開拓が進められていた。

糠部の地方は、いま二戸・九戸・三戸・上北・下北の五郡にわかれ、中世以来南部氏の所領とされているが、それは南北朝の内乱以後のことであり、鎌倉時代には北条氏の勢力範囲にあつたと思われる。すなわち、北条時頼は糠部五戸地頭代職を時頼の私恩として三浦介平盛時にあたえているが、(宇都宮文書等)これは五戸の地頭職を北条氏がもつていたことを語るものである。建武二年九月、三浦介平高継は、勳功賞として、糠部内五戸を三浦一族が給主としてもつていた由緒によるものである。建武元年四月、糠部郡内の關所一戸の工藤四郎左衛

門跡同子息左内次郎跡八戸尻打、八戸工藤三郎兵衛尉跡、三戸糠部新五郎入直跡が南部又次郎等に預けられているが、さらに同元年六月には国司宮人清高が南部師行にあたえた消息には、一戸浅野太郎跡を構藩孫次郎、三戸合田四郎三郎跡を工藤三郎、同大瀬二郎跡を岩崎大炊六郎にあたえたことが見え、さらに建武二年二月の頭家の国宣には、糠部郡南門田構藩孫五郎入直跡を構藩三郎祐貞、さらに同二年三月頭家の下文には、七戸結城七郎左衛門尉跡が南部政長、同二年九月の御教書には、糠部南門内横溝六郎三郎入直跡中里村が構藩里親にあたえられたことが見える。このうち工藤が得宗被官であることはいうまでもないが、さらに構藩の名も吾妻鏡仁治二年十二月、建長三年八月の茶、合田、大瀬の名も円籠寺毎月八月大爾結番支名注文に見え、何れも得宗御内人と思われる(鎌倉幕府訴訟制度の研究)。恐らく北条氏は、糠部の地方を得宗領とするにあたり、自己の被官をそれぞれ給主乃至地頭代として補任し、それに管理を委任したのであろう。元弘三年十月の白河文書には、九戸の右馬権頭茂時の跡を結城親朝がもつたことを伝えており、九戸が北条氏の所領であつたことが明らかである。ところ南部氏であるが、南部氏の系図によると、光行は頼朝から肥賢として糠部をもらい、建文二年由井次から八戸浦に着岸したとある。これはもとより信頼できない。南部氏のこの地方に下向したのは、光行の次子夷

長の四世の孫師行、その嫡次長のとまであるらしい。祐清記によると、政長は、武田氏の圧迫を受けて、甲斐を出で、惣領の居住する糠部の住地をたずねて、仙北から八戸浦に着岸、所の領主工藤殿の城を兼ね取り、さらに八戸へ参つたのである。惣領の在所をたずねるか、どうかは疑問であるが、南部氏が由井決からでなく、仙北から来たといふ伝は、或程確かであろう。また八戸の領主が工藤でありたことも尙置いはない。ただし諸部氏は工藤の所領を奪つたいうより、工藤氏と縁を結び、その力をかりてしだいに糠部に勢力をひろげて行つたのではないかと思われる。すなわち、八戸南部の文書によると、南部信元之母かいは、巖石の領主であつた父の工藤貞行から、陸奥の伊具庄金原保などをあてられてゐるが、これによると、かいはの夫は南部政長の子信政であつて、工藤貞行の曾になり、しせんその子信元はかいはにあてえられた工藤氏の所領を受けついで行つたらしい。

一方、盛風記によると、南部政長は八戸湊の城主工藤大房丸大助（祐）―祐経の子といふ―の家をついたとあり、南部家譜には八戸領主工藤特盛秀信の曾とあり、さらに打根國誌には、大助の長子は南部政行の養子となつたといふ。諸説もまちまちであるが、これらの伝をを通じて、南部政長乃至政行が八戸の城主工藤氏と縁を結び、それを背景としてこの地方に地盤を築いて行つたことが考えられる。元弘の孝兵にあたり、南部政長が奥州から

馳せ参じたといふのも、すでに鎌倉末期、政長の地盤が糠部地方にあつたことを示している。

南部氏の本家は北条氏とはきわめて近い關係にあつた。糠部に勢力を築くきりかけもそこにあるかと思われるが、政長が元弘の孝に馳せ参じたのは、庶民家として本家家にたてをついたのであるが、どうか、明らかでない。

次に津軽の地方では、すでに北条義時のころから得京領が設置されている。このころ津軽の大郡、外と内の三配すのが確保され、それ／＼代官として外三部には安東氏、内三部には工藤・曾我が任命された。義時が奥和の諸部を工藤氏、平賀の諸部を曾我氏に与え、これを地頭代にしておるといふようなことは固史研究に書いたところである。義時はさらに和田氏を倒してその所領を没收してから、これを北条氏の直轄領にした。たとへば、北条氏が直轄領とした陸奥の遠田郡など砂金二万匁を納め、土産地であつたといわれる程に、北条氏のドル箱になつていたようである。

義時のあとを継いだ泰時と時頼は、この得京領をいっそう拡充した。とくに時頼の代になつて直轄領は目に見えて増大してくる。時頼の政治はまことに御家人の心をつかむのに巧妙であつたと思われる。大番役の任期六ヶ月を三ヶ月にして御家人の負担を軽くしてやつたといふように、評定衆に対して引付衆を設けたことなど、時頼の善政とされている。鉢の水伝説などに見られる時

頼の廻國伝説も、時頼が御家人の心をくかむ政治を行なつたところから生み出されたともいい得るであろう。しかし、もう一つついで考えてみる必要がある。たとへば、太平記では、時頼が難波の浦に泊つたとき、宿主の尼から話しを聞いた。尼の旧領を奪いとのに地頭を罰して旧領を尼に返したということになっている。佐野の場合も同様所領をとられて貧しくなつた御家人の話である。地策が一方で強力になるかと思つと、また、その土地を取りあはせられる弱い御家人もおるわけで、そうした時に弱い御家人に味方をして、これを時頼のもとに集めるといふ筋にたつてゐる。結局、当時、小さな御家を単位とした鎌倉幕府の体制がたゞ／＼崩れ、守護などの有力御家人を中心とする政治体制に変わりつゝありたとき、その際にある弱い御家人たちを北条政権のもとに糾合して、北条政権の拡大をはかるゝとする傾向が、この時頼の段階から著しくなつてきたと考えられたいであらうか。時頼は宝治合戦に三浦氏を倒して、一族およびこれに加担するものの所領を没收して、これを得宗領とした。三浦氏の所領であつた名取郡や台津が北条氏に没收されたのは、その一例である。時頼の廻國伝説が出てゐる地方は、とくに得宗領の多い地方である。埴津は北条氏の守護を身してゐたところである。また、松島の瑞巖寺は、申世に於いては松島寺という禅寺であつた。この禅寺にたつたのは、時頼がここを訪れ、禅僧を住職にしてから

だといわれている。時頼が訪れた時は天台の寺であつた、その天台の僧侶が時頼であることを知らないで虐待したといふことから、帰國後、時頼が兵をやつて天台の寺をほろぼし、僧兵を追放し、ここに高徳の僧を招いて禅寺をつくらせた。それが松島寺であるといふのである。このような廻國伝説は江戸時代の記録に見えてゐるものであるが、あるいはこの松島寺の付近は得宗領であつたのではないかと思う。名取郡が得宗領になつてゐるし、時頼の従臣に伊具の四郎なるものあつたことから考へると、仙台付近には得宗領の多かつたことが考へられる。青森県三戸郡名川の法光寺は弘安三年時頼が廻國のめぐりこれを接待した僧を廂山とするもので、もとあつた真言宗の寺を他に移して建てた禅刹であつて（名川の禪主誌才二集）時頼を兩基としてゐる。この地には工祿の一族が給主となつており、北条氏の得宗領であつたことが容易に推定される。その他、北条氏と縁の深い唐糸の伝説も、角館・津軽等各地にあり、それを調べて行くと、どうやら時頼の廻國説と得宗領との間に深い關係があることが知りれる。それ以後、安達氏の乱、いわゆる羅月騒動などで東北地方にある安達氏關係の部將の所領もすつかり没收されてしまつた。こうして北条氏は東北の各地でますます勢力を持つようになつた。この場合に何と申してもこの津軽の地方が北条氏としては、最も深い、また重要なところとなつてゐたのである。この地の長瀞寺の鐘

が円覚寺の鐘と同じ系統のものであることから考えると、北条氏が得宗領の各地に寺院を創立し、その寺院に鎌倉の鐮倉師の造った精巧な鐘を寄進していたことも或る程度推定される。それは得宗領を経営するために必要不可欠なことでありたのであろう。この以前から黒石にかけての地方のように、得宗領のあるところに意外他の地方より早く鎌倉文化が受けつがれていたのではなからうか。この地方に鎌倉文化の名残りをとどめるいく／＼な遺蹟、遺物があることを考へると、いよいよその感を深くするのである。

### (三)

とりわけ私として興味のあるのは、安東氏と北条氏との関係である。何故に安東氏が北条氏の被官になつて活躍をはじめたかは、北条氏が日本全国にわたつて交通の要地、重要な生産地帯、そしてたものを次々に掌握して行ったことも関連するように思われる。すなわち安東氏の拠点である十三湊、これは河口の港であり、松前地との連絡をはかる上でも、北方に於ける最も重要な拠点であった。ちようど八戸から三戸を北条氏がおさえて南部氏等をこゝにおいたのと同じように、この北端の重要地点を北条氏が確保してきたのと考へる。その北条氏は日本海岸寄りに、重要な港を飛び石伝いに確保して行った。男鹿半島にも安東氏が進出している(歴史研究参

照)。そして南の方に行くとも、北条氏の所領としてものとも大事なのが若狭の小浜の地であった。そしてこの小浜と十三湊の間に往来する船が、南東御免の津軽船といわれて十二艘あった。これが鎌倉の中期頃に越中の放生の津から三戸の港のある坪江河口の菟の港へ船などを運んで来ていたが、この放生の津が北条氏の直轄領であったことも、最近明らかになることができた。この安東氏は鎌倉の山内に邸を持ち、北条氏の被官として、日本海から瀬戸内海にかけて水運の方面で活躍している。得宗被官の中には、工藤とか曾我とか伊豆の武士たちが多いが、またその家系などに高利貸的性根をもつた名主があつた。小浜などにいる者の中にも、石見房寛秀といつた高利貸があつてそれが得宗被官のまた家来になつてゐる。北条政権には、鎌倉の政権とちがつた方向が出ておるのではないかと思われる。平家政権が源氏政権とちがつたのは、平家政権が瀬戸内海の水運を掌握していたところだといふが、この場合にはまた平家そのものが、商人を掌握したといふわけでないが、北条政権になると水運の拠点を次々に掌握しておる。小浜からさらに西の方へ行くと例えは九州でも北条氏の勢力が伸びていて、熊本、宇土半島を北条氏が持つており、相模守殿の権取りといふ者が活躍しおる。薩摩の種子島、豊後の佐賀岡を北条氏が握り、瀬戸内海では、塩飽島を握っている。すなわちこのように調べていくと北条氏の得宗領のあるところ

には重要な港であるか、あるいは何らかの拠点になるところが多い、それらの拠点にはそれ／＼御内人が配属されておられ、その御内人の家来に高利貸的な名主がおられ、こういうふうな形で北条政権というのは、鎌倉政権より古い体制の中で次第に新しい全国政権を目指して流通といふようなものを支配する形をとっているのでは無いのか。このころになると、地頭領主も動産的領主、すなわち莫業だけやっている領主から流通を支配する領主にまで発展しておられるが、そうした方向が北条氏の中にも見られるのではあるまいか。北条政権を倒した建武政権は、この北条政権に見られるこの新しい方向をさらに受けついで行った政権といふことができる。それでは、全国取権を目指してしだいに層的転換を遂げつゝ、或つた北条政権が、前代に鎌倉体制を崩して自らの力で全国支配を行わなかつたか、また行い得なかつたのはどういふ訳であるか。その理由の一つとして、得宗領が各地にばらまかれており、また全国町にこの流通を掌握するような体制が完らねても決して組織的なものではなかつたといふことがあつたであろう。足利氏が出てきたのは、勿論足利氏からであるが、三河が拠点になり東海道の重要なところを握れ、さらに流通の拠点である畿内を掌握した。そういうところと並に云えば足利氏が強力になつていく一つの地盤があつたと思われる。しかし、その足利氏も鎌倉末期、東北の地では高清水とかあつたところを少し持つていくに過ぎなかつた。東北の地では北条氏の勢力が伸張していくのに対して、各地の武士が反感を感じてい

た。相馬氏などにしては長崎屋元などに所帯をさかれています。北条氏が東北の各地で勢力を伸ばせば伸ばすほど、それに反抗する武士たちが多くなって来る。結局、結城とか、大河とか、元弘の森にあつたので鎌倉攻めに参加した武士の中にはしだいに領主として成長し、北条氏の勢力振張りに反感を感じていたものが少なくなつたのであろう。頭家が東北にやつてきた時、多頭城に南軍の拠点をきめた時には、東北の各地から頭家のもとに武将たちが集まつてきた筈である。だから最初、建武の新政が破れて、尊氏が鎌倉にやつてきた時、これを追いかけて頭家の軍隊が、京都に上つて行く、その時には陸奥の精兵、殊に新馬武者のすぐれた軍隊を引きつれて攻めて行くわけであるが、この京都大遠征が可能になつていたということとは、奥州の馬の優秀さを示すものでもあるが、同時に奥州の各地に北条の氣勢があがつていた。それを頭家がたくみにつかまえたのだと、このようにも考えられるのである。こういうふうにして北条氏と東北地方との関係―具体的に得宗領の擴張といふようなことを研究していくと、日本の歴史における東北の役割がはつきりしてくる。とくに東北の地でも南部三戸と津輕の地方に北条政権の拠点ができており、鎌倉文化が移し植えられたといふことは、またことに興味深い。こうしたことを念頭に描きながら、この地方の研究を深めていけたらきたい。やはり郷土の歴史は郷土の方によつてなされなければならぬ。国史研究会などを土台として大いに郷土の研究をすゝめられることを希望する。